

る意味では有意義だったので、関連分野に携わる人には国際学会の選択肢の一つとしてぜひお勧めしたい。

最後になりましたが、国際会議参加にあたり、助成を賜

9th International Mycological Congress (IMC9) に参加して

東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻
微生物学研究室 樋口裕次郎

今回、スコットランドのエジンバラで開催された、第9回国際菌類学学会 (IMC9) に出席して来た。本学会は、4年に一度開催される真菌の生物学では最大級の学会である。今回参加者は1,500人以上にもおよび、半ばお祭りのように盛り上がっていた。事実、開催都市のエジンバラでは、この時期年に一度のFringeと呼ばれる大きな芸術祭が開催されており、町中が観光客で賑わっていた。毎日のようにイギリス特有のシャワー(短時間の雨)はあるものの、概して気候は良く、日中は20度前後、朝晩は15度ぐらいで、半袖のポロシャツに少し寒いときは長袖を1枚羽織る程度で快適に過ごせた。

学会初日には登録と開会セレモニー(写真1)が行われ、その後5日間にわたり、毎朝9時から1時間のプレナリーレクチャーに始まり、11時から14時までは各シンポジウム、途中ランチをはさんで、14時から16時でポスターセッション、そして16時から18時半まで再びシンポジウムというプログラムで行われた。伝統的にこの学会の発表の大半は、真菌の分類学に関するものであったが、今回は私が行っているような細胞生物学の発表も多くなり、関連するシンポジウムも数多く行われた。こうした細胞生



写真1 学会会場 (Edinburgh International Conference Center) 前で参加者達を歓迎するバグパイプ演奏。

りました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、御礼申し上げます。

物学のシンポジウムでは、真菌を扱う世界の有名な研究者が、未発表データを含めた熱のこもった講演をし、内容は非常に興味深いものであった。

私のポスター発表と関連したEndocytosis & Exocytosisと題されたシンポジウムのセッションでは、酵母 *Pichia pastoris* における分泌異種タンパク質生産にむけた戦略や、糸状菌のモデル生物である *Aspergillus nidulans* や *Neurospora crassa* におけるエンドサイトーシスの最新の知見が報告された。自分の行っているエンドサイトーシスに関連した発表を聴くことで、この分野で非常に活発な研究が行われていることを再認識できた。また、当研究室の北本勝ひこ教授により、「麹菌 *Aspergillus oryzae* における菌糸先端部におけるエンドサイトーシスのリサイクリング」と題した発表も行われ、会場からは二つの質問がなされ、観客の興味を引いた発表であったことが伺われた(写真2)。自分は、「麹菌 *Aspergillus oryzae* におけるエンドサイトーシス部位に局在する推定 AAA ATPase の解析」というタイトルでポスター発表を行い、10人弱とディスカッションすることができた(写真3)。今回、酵母ツーハイブリッドスクリーニングにより、エンドサイトーシスにおいて機能すると考えられる AAA ATPase としては新規の因子を同定したことに対して、皆高い評価をしてくれた。また、データが非常にクリアなため、わかりやすいとの褒め言葉ももらえ、自分の行ってきた研究に対して自信を深めることができた。



写真2 Endocytosis & Exocytosis セッションで発表を行った北本教授(左から3人目)と筆者(左から2人目)。

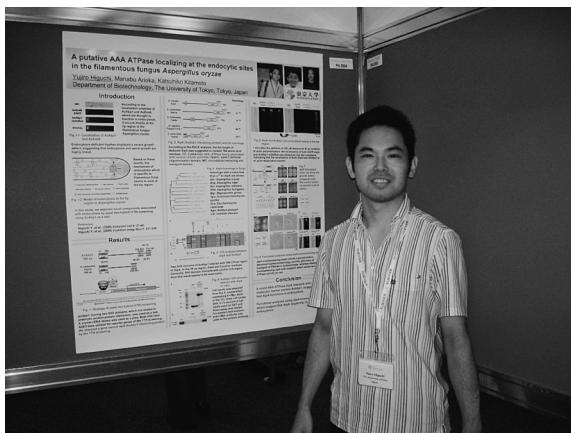


写真3 ポスター発表を終えた筆者。

私事であるが、来年度以降の進路として海外でのポスドクを志望していた筆者は、今回の学会で多くの人と交流を持つとうと考えていた。学会2日目、イングランドのExeter大学のGero Steinberg教授が、プレナリーレクチャーの最後に、3年間のポスドク募集中というメッセージをスライドに映したため、自分はその翌日に声をかけ、その場で30分間の面接を受けた（写真4）。面接内容は、ポスドク志望の動機に始まり、これまでの研究経験、そしてSteinberg教授の講演に関する内容や今後の研究の方向性に関する質問であった。私は、これまでにSteinberg教授の行っている、二形性の酵母*Ustilago maydis*におけるモータータンパク質を中心とした細胞内輸送の研究を、ある程度把握していたので、質問にはそれなりに答えることができたと思う。翌日CVを送ると、次の日の朝に、その日の午後もう一度面接を行おうとの連絡をもらった。そこでは、同大学でSteinberg教授と同僚というNick Talbot



写真4 学会会場内で、イングランドのExeter大学のGero Steinberg教授（左から2人目）に面接を受ける筆者（右から2人目）。

教授が同席し、2人から30分程の面接を受けた。そこでも、具体的な研究内容に対しての意見を聞かれた。ちょうどその面接の後が自分のポスターの時間であったため、Steinberg教授に発表を行ったところ、かなりの高評価をもらえた。そして、その1時間後、Steinberg教授は笑顔で、“You've got a job.”と言ってくれ、すぐに今後のことについて30分ほど打ち合わせをした。現在、Steinberg教授の研究室に移るための準備を行っている。

最後になりましたが、このような貴重な経験および機会を得るに当たって支援して下さった財団法人農芸化学研究奨励会の関係者の方々に深く感謝致します。今後、研究成果という面において奨励会に恩返しができるよう、そしてまたこのような国際学会に出られるよう日々研究に精進していきたいと思います。

2010 Yeast Genetics and Molecular Biology Meetingに参加して

東京大学大学院農学生命科学研究科 福田良一

2010年7月27日から8月1日にかけて、カナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学において、2010 Yeast Genetics and Molecular Biology (YGM) Meetingが開催された。YGM MeetingはThe Genetic Society of Americaの主催であるが、世界中から酵母研究者が参加し、酵母の遺伝学と分子生物学に関する議論、情報交換する場となっている。この会議は通常はアメリカ国内で隔年開催されるが、前回に引き続き今回もカナダでの開催となった。なお、次回は2012年にプリンストン大学で開催

される予定である。

今回の会議のハイライトは、Paul Nurse博士、Lee Hartwell博士、Jack Szostak博士の3人のノーベル賞を受賞した酵母研究者の講演であった。特にNurse博士とHartwell博士に元宇宙飛行士でカナダの国會議員のGarneau氏を交えたパネルディスカッションでは、科学と社会についてユーモア交えた討論がなされ、また会場からも活発に意見が出され、たいへん興味深く拝聴した。

一般講演では、プラットフォームセッションで80題、シンポジウムで14題の講演が、またポスターは586題の発表があった。今回の会議では、トロント大学のCharles Boone博士によって開発されたSynthetic Genetic Array (SGA)を用いた研究の発表が特に目を引いた。酵母 *Saccharomyces cerevisiae* は真核細胞で最も早くゲノム配